実践速報

教育システム情報学会誌　Vol. 33, No. 1　2016
pp. 43–46

誤りから学ぶ看護技術の学習システムの効果

徳永　基与子*，平野　加代子*

The Effect of Watching Videos of Making Mistakes
—On Nursing Skills—

Kiyoko Tokunaga*, Kayoko Hirano*

1.　はじめに

2001 年大学設置基準の改正以降，看護実践能力の育成を目的に e ラーニングの導入が試行されている．看護実践能力の要素となる看護技術は，患者の安全を保障すべく確実な習得が望まれる．一方で，過密なカリキュラムの中，限られた時間の中で多様化する看護技術の習得に向け，教授方法の工夫や自己学習の確保は必要不可欠と言える．このような状況を踏まえ，より確実な看護技術習得を目的に，昨年より看護技術の学内演習に e ラーニングによる動画視聴を利用した自己学習を組み込んだ学習プログラムを実施してきた．その結果，学習意欲の促進やグループワークの活性化への効果が見られた [(1)]．一方で，“学生が見たばかりの教員の動作を真似できない” という新たな問題点が発生した．見れども見えずの学生の現状から，「見なくては」と思わせる仕掛けの必要性を感じた．H・J・パーキンソンは，「学習者は誤りながら学ぶ存在であり，教師は学習者自ら誤りを学ぶ環境を構成する存在」と述べている [(2)]．さらに，「教師は試行錯誤による誤りの排除という選択的手続きを促進することで，学習者が誤りから学ぶのを援助する」と，教師の役割を述べている [(2)]．患者の前では決して許されない誤りも，練習の場である学内演習では許される．謝っても修正可能な学習環境である学内演習で，看護の初学者である学生も誤りに気づき修正し技術を身につける．そのために，まずは誤りに気づく仕掛けが必要となる．自己評価だけでは気づけない誤りも，他者による客観的な観点からフィードバックすることで気づくことが可能となる．特に，教員による専門的観点から学生の自己動画の誤りを編集するフィードバック（以下，動画フィードバック）は，学生に「見なくては」と感じる大きな契機と考える．

そこで，研究者らが開発した従来の学習プログラム [(1)] に他者評価および教員による動画フィードバックを取り入れた新学習プログラムを考案した．今回は多くの看護場面に必要な「体位変換」，および複合技術であり習得が困難な「清拭」の 2 項目で活用し，学生に変化が見られたため，プログラムの具体と看護技術習得における効果について報告する．

2.　研究目的

他者評価および動画フィードバックにより，看護技術習得にどのような効果があったのかを検証する．

3.　研究方法

3.1　研究対象

本研究の目的を伝え，匿名性の保持を確約のうえ，書面により同意を得た A 大学看護学科の女子学生 94 名．

3.2　研究期間

体位変換の項目：2014 年 4 月 24 日から 5 月 14

* 京都光華女子大学（Kyoto Koka Women' s University）
受付日：2015 年 6 月 11 日；再受付日：2015 年 8 月 28 日；採録日：2015 年 9 月 28 日